Japanese Journal of Applied Psychology
2001, Vol. 27 No. 1, 63-64

国際学会出席印象記

第2回交通と運輸の心理学に関する国際会議に参加して

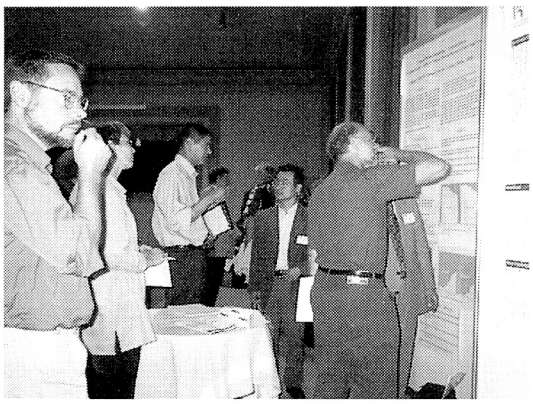
(The 2nd International Conference on Traffic and Transport Psychology)

科学警察研究所　松　浦　常　夫

2000年の9月に上記の会議がスイスの首都ベルンで開催された。この会議は10年前に日本（京都国際会議場）でも開催された国際応用心理学会議（IAAP）の一部門である交通と運輸の心理学が一人立ちして開催したもので，今回が第2回目の若い国際会議である。部門の代表がオランダとイギリスの研究者であることもあって，4年前のスペインのバレンシアに続いて今回もヨーロッパで開かれた。

会議はアルプスの雪解け水を運んで流れるアーレ川を見下ろす丘の中腹に立つ会議場で4日間にわたって開催され，5つの会議室に分かれてパラレルに行われた発表件数の合計は300件弱を数えた。日本からは地元のスイス，ドイツ，スウェーデンと並ぶ30名が参加したが，約半数はわが国の交通心理学会が主催した視察旅行のメンバーで，実際に発表したのは18名であった。先のシドニーオリンピックでの日本の金メダル獲得数が301個中の5個であったことを考えると，日本の応用心理学の端くれである交通心理学も健闘していると言えるだろう。

基調講演，シンポジウム，ワークショップ，個人発表を概観して，今回の会議で発表された交通心理学のテーマをまとめると，従来からある理論・モデル・方法論，運転者行動（個人差・集団差，パフォーマンス，リスク・テーキング，運転シミュレータ等），態度（測定，動機，攻撃性等），運転時の視知覚（眼球運動，注意等），危険認知（ハザード知覚の理論やテスト等），疲労・眠気，アルコール，ヒューマンファクター（車室内ディスプレイ，道路標識，運転負荷等），事故分析，免許・運転者訓練・再教育，診断（運転適性検査）・選抜が今回も発表の中心を占めた。また，新たな展開としてはITS（情報通信技術を活用した道路交通システム）の一部である運転者支援に関する研究（カーナビ，自動運転等），人の移動・移動手段の選択・車使用等の交通行動に関する研究，Ajzen（1985）によるTPB（プラン行動理論）等の社会心理学的理論を運



ポスター発表風景

会議のディナーパーティー風景

転者行動に応用した研究，道路交通環境や車内環境が運転者の感情や行動に与える影響を調べる環境心理学的な研究，高齢運転者や障害者に関する研究が登場するようになった。

ところで今回の会議の目的は，主催者の Dr. Huguenin（スイス事故防止協議会）によれば研究と実践との交流を促進すること，交通心理学における新しく有望な成果や分野を見つけだすこと，そしてこのような知見を応用に生かすことであった。これはともすれば応用心理学者の念仏となりかねないが，ヨーロッパでは交通心理学者が国や EU の政策をリードしたりそれを担当したりする事が日本の場合より多いため，会議にもその趣旨に沿った発表が多いような気がした。